

中国本草の中心地について

岩間眞知子

東京都

中国の国土は広大で、地域による違いは大きい。中国起源の薬学、薬書である本草、その中心地域はどこであったろう。時代によっても変遷は当然あったに違いないが。

明清時代、多くの医薬書が刊行された。主要な医薬書の著者について調べてみると、明代34点のうち浙江省11・江蘇省9・安徽省6・江西省3、清代35点のうち江蘇省13・浙江省8・安徽省3・広東省2となり、揚子江下流域いわゆる江南のものが圧倒的に多い。明代の本草を代表する李時珍の『本草綱目』も出版は金陵、今の江蘇省南京であった。明初は首都を南京としたが、三代永楽帝は北京に移し、清の首都も北京であった。にもかかわらず、医薬書の編著者には江南の人が多い。

さて、宋が金に追われて南下し、南宋は都を臨安つまり杭州に定めた。以後、「天上に天堂(天国)あり、地上に蘇杭あり」と言い、地上の天国と形容されるほど江南の蘇州と杭州は繁栄した。

もともと後進地域と見られていた江南であったが、明清時代、絹・綿業の発展により経済は一層発展し、文化も花開いた。文化人も書画も江南に集まり、印刷業もさかんで、杭州の印刷技術は「杭本」と称され、高い評価を受けた。『本草綱目』に序文を寄せた王世貞、書画で名高い董其昌、文徵明、唐寅、祝允明、また思想家・王陽明、考証学者・顧炎武、杭州に集った文化人は実に多い。政治の中心は北京でも、文化は圧倒的に南優位で、南の文化人が優勢であった。官吏登用試験の科挙でも、南北一斉の試験が行われた明代では南が圧勝した。

中国伝統の文化人の教養には、詩書画があり、医薬・養生もあった。宋の大政治家・范仲淹が「良相とならずんば、良医となるを願わん」と述べてより、その言葉は文化人たちに支持され、惠民濟世の大事として医薬の地位は高まった。また明から清にかけて、温病と総称される急性伝染病が猛威を振るい、ことに温暖湿潤で人の往来が激しい江南では、頻繁に発生した。温病には、腸チフス・コレラ・赤痢・マラリア・天然痘・猩紅熱・麻疹・ジフテリア・ペストが含まれるという。そうした背景に、温病の治療や予防に対する医療の発展の必要もあって、明清時代の主要な医薬書の著者は、江蘇省と浙江省が多くなったとも考えられる。

ところで江南が本草の中心であったことは、明清以降だろうか。考古学調査によると、長江流域には黄河文明よりも早くから古代文明が存在したことがわかってきた。一万四千年も前に長江中流域では稲作が始まり、長江流域の古代遺跡は次々と発見されている。

浙江の医薬も、考古学調査から起源がはるかに遡ることが分かってきた。河姆渡遺跡から多種の植物漢方薬材や、鍼灸に使用されたと考えられる針、薬を煎じる鍋などが発見された。井戸も整備され、老和山遺跡では臼と杵も発見された。臼と杵は稲の脱穀と共に製薬に使用されたと考えられる。

また漢代の成立とされる『桐君薬録(桐君採薬録・桐君録なども)』の著者・桐君は、浙江省桐廬の桐君山に廬を結んでいたという。『呉普本草』の著者・魏の呉普は江蘇省揚州、『葛氏方』の著者・東晋の葛洪は江蘇省句容の人である。『本草集注』の編著者・南北朝の陶弘景は江蘇省南京の人で、その改訂版とも言い得る唐の『新修本草』は、『本草集注』所載の薬が江南に偏していると批判して誕生した。ということは『本草集注』までの薬は江南が中心と言えるのではないだろうか。次いで『新修本草』の遺漏を拾う目的で編纂された『本草拾遺』の著者・陳藏器も、浙江の人である。宋代の主流本草の基となる『経史証類備急本草』は、四川の医家・唐慎微が編纂し、その増補版の『経史証類大観本草』の編著者・艾晟も江蘇省儀徴の人であった。

こうして見ると、中国歴代本草の中心地の一つは、長江流域、とくに江南と言ってよいと考える。